

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1. 腎と透析 70巻増刊号 スタンダード透析療法	共	2011年5月	東京医学社	小児においては、通院治療を実施することが多く、栄養素等指示量遵守のためには、母親（調理担当者）を中心とする家族の理解と協力が必要不可欠である。さらに、保育所、幼稚園、小・中学校等の患者を取り巻く環境における協力者との連携も必須である。 小児への透析治療「小児透析患者への栄養指導」を担当（pp:216-219）。 （編集 『腎と透析』編集委員会） 〔共同執筆につき担当部分抽出不可能〕
2. ステップアップ臨床地・校外実習	共	2016年4月	建帛社	（分担執筆 大津美紀・濱谷亭子） 学外実習である臨床実習の事前・事後の学びに関する教科書である。「病院・介護老人保健施設」、「保健所・保健センター」の分野について担当。（pp:45-54、pp:94-95） （編者 長谷川輝美・永井徹） （著者 植松節子・大津(松崎)美紀・岡田文江・串田修・竹内真理・細山田洋子・宮原公子）
3. ステップアップ臨床栄養管理演習	共	2017年4月	建帛社	栄養管理の経験が少ない学生が栄養ケアプロセスの手順を理解・実践することを目的とした管理栄養士養成課程用の演習テキストである。基本症例による栄養管理として「7. 心不全」、「12. 小児食物アレルギー」について担当。（pp:62-66、pp:88-92） （編者 長谷川輝美・永井徹） （著者 石長孝二郎・大津(松崎)美紀・落合由美・片桐義範・竹内真理・田中寛・調所勝弘・比嘉並誠）
4. ステップアップ臨床栄養管理演習〔第2版〕－基本症例で学ぶ栄養管理プロセスの実際－	共	2020年2月	建帛社	新しい栄養管理システムとしてNCM（栄養ケアマネジメント理論）があり、その手順を理解・実践することを目的とした演習テキストである。基本症例による栄養管理として「7. 心不全」、「12. 小児食物アレルギー」について担当。（pp:62-66、pp:88-92） （編者 長谷川輝美・永井徹） （著者 石長孝二郎・大津(松崎)美紀・落合由美・片桐義範・竹内真理・田中寛・調所勝弘・比嘉並誠）

<p>5. 最新 子どもの食と栄養 食生活の基礎を築くために</p>	<p>共</p>	<p>2021年3月</p>	<p>学建書院</p>	<p>保育養成課程カリキュラムの一つである「小児栄養」のテキストである。土養成課程用の演習テキストである。「6章 特別な配慮を要する子どもの食と栄養」のうち「発熱時」「むし歯(う歯)」について担当。(pp:190-195) (編者 飯塚美和子・瀬尾弘子・濱谷亮子) (著者 浅野雅子・飯塚美和子・大津(松崎)美紀・五関正江・瀬尾弘子・高橋恭子・圓谷加陽子・成田豊子・野田智子・濱谷亮子・松井貞子)</p>
<p>6. 新版 臨床栄養学 栄養ケアプロセス演習 - 傷病者個々人の栄養ケアプラン作成の考え方-</p>	<p>共</p>	<p>2022年4月</p>	<p>同文書院</p>	<p>外来、入院、在宅における17症例の各栄養ケアプロセスが提示されている。さらに各疾患の演習問題の症例があり、これらを通じて栄養管理への理解を深めることを目的としたテキストである。「第6章 小児肥満症【外来】での栄養ケアプラン作成」について担当。(pp:77-89) (編者 鈴木純子) (著者: 三輪孝士、氏家志乃、中川幸恵、大津美紀、岡本智子、峰岸夕紀子、稲村なお子、西内美香、武敏子、渡邊和美、志賀一希、山口留美、田中洋子、中村育子、伊藤久美子、岩部博子)</p>
<p>(学術論文(欧文)) 1. Plasma homocysteine and folate levels and dietary folate intake in adolescents and young adults who underwent kidney transplantation during childhood (小児期に腎移植を受けた思春期・若年成人の血漿ホモシステイン、血漿葉酸、食事性葉酸摂取量について)</p>	<p>共</p>	<p>2013年5月</p>	<p>Clin Exp Nephrol Vol. 18 No. 1 DOI 10.1007/s10157-013-0819-3</p>	<p>小児期に腎移植を受けた思春期・若年成人の血漿ホモシステイン、血漿葉酸、食事性葉酸摂取量の関連性について検討した。血漿ホモシステイン高値群では血漿葉酸値は低く、また食事性葉酸摂取量も少ないことが認められた。よって、食事性葉酸摂取量を確保する栄養管理の必要性があると考えた。(pp:151-156) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 Ryoko Hamatani・Miki Otsu・Hiroko Chikamoto・Yuko Akioka・Motoshi Hattori 分担執筆 濱谷亮子、大津美紀、近本裕子、秋岡祐子、服部元史 (査読有)</p>

<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 某企業における健診結果で肥満とみなされた男性社員の生活状況に関するアンケート調査</p>	<p>単</p>	<p>2003年 3月</p>	<p>日本女子大学大学院</p>	<p>栄養相談・指導を進める場合、対象者のタイプはさまざまであり、同一パターンの指導法では行動変容を促させるのが困難である。よって、某企業の健康診断結果の検討と、肥満とみなされた社員に対してアンケート調査を行い、健康観など健康問題に関する意識の相違を調査し、効果的な行動変容をおこさせるための手がかりを得ることを目標とした。結果から、肥満と生活習慣病に関する知識の提供が必要と考えられた。その上で、技術や方法の具体的な指導が重要であり、それをサポートする家庭や企業などによる環境作りが必要である。(修士論文) (査読有)</p>
<p>2. 生活習慣病教室を開講</p>	<p>共</p>	<p>2005年 6月</p>	<p>医療の広場 第45巻 第6号</p>	<p>チームで行っている生活習慣病教室のあり方と問題点について検討した。チームによる「生活習慣病教室」は、単に知識を与えるだけでなく生活習慣の改善への動機付けに有効であると考えられた。また、問題点については改善を行い、チームで効果のある集団教育を実施していきたい。(pp: 5-9) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕</p>
<p>3. 小児保存期慢性腎不全患児の栄養管理</p>	<p>共</p>	<p>2006年 8月</p>	<p>日本小児腎不全学会 雑誌 第26巻</p>	<p>小児保存期慢性腎不全患児の栄養管理は、成長発育を成し遂げながら、腎機能低下の遅延を図るには栄養素摂取量の充足が不可欠であるが、その中でも、たんぱく質摂取量の管理が重要であることが推察された。また、患児のQOLの向上のためにも家族、学校などのサポートは不可欠である。(pp:126-129) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕</p>
<p>4. 栄養管理によりBUNの低下が見られた乳幼児低形成腎患児の症例</p>	<p>共</p>	<p>2006年 8月</p>	<p>日本小児腎不全学会 雑誌 第26巻</p>	<p>セカンドオピニオンを求め当腎臓小児科へ来院し、食事管理によりBUNの低下が認められた。今後、離乳期になり、多様な食品の摂取機会増加に伴うたんぱく質摂取過剰が懸念される。成長発育に十分な栄養素摂取を維持し、腎機能の保持、透析導入遅延のために食事管理の継続が大変重要であると推察される。 (pp:130-133) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕</p>

5. NST導入へ向けて入院患者の栄養実態調査とその後の活動	共	2006年 10月	医療の広場 第46巻 第10号	NST立ち上げのため、当センターのデータに基づいた現状を知ってもらうことが必要と考え、入院患者の栄養状態の実態と補給量および充足率の調査検討を行った。調査の結果を勉強会で公表したところ、医師をはじめとする多職種の職員の意識の変化が見られた。(pp:36-40) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 杉山真規子、森山裕、長谷川輝美、秋葉正文、河内正治、高橋美恵子、大澤繁男、 <u>太津美紀</u> (査読無)
6. 小児保存期慢性腎不全患児の治療における栄養管理の有効性の検討	共	2007年8月	日本小児腎不全学会 雑誌 第27巻	栄養管理を継続してきた症例について検討したところ、指示量に対するエネルギー・たんぱく質の摂取バランスがよく、エネルギー及びたんぱく質の充足率がともに100%に近いほどBUNが低値傾向にあり、腎機能低下の抑制に有効であると考えられた。(pp:155-158) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 <u>太津美紀</u> 、濱谷亮子、飯塚美和子、服部元史 (査読無)
7. 栄養管理にて良好な成長発育が得られた三尖弁閉鎖症術後腎不全の1乳児例	共	2008年8月	日本小児腎不全学会 雑誌第28巻	三尖弁閉鎖症術後腎不全に対する栄養管理を実施した。1歳0ヶ月では摂食障害・発育遅延が見られ、離乳を完了していなかったため、指示量を満たす食事を摂取することは食事量の少ない患児にとって困難であったが、治療用特殊ミルク、粉飴などを含めながら離乳を進め、栄養管理の継続が可能であった。本症例のように管理栄養士が食生活に応じた食品構成の提示や発育発達段階に応じた適切な支援を行うことは、小児期の慢性腎不全患児の成長発育を良好に保つ上で不可欠であると考えられる。(pp:76-77) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、飯塚美和子、服部元史 (査読無)

8. 保存期慢性腎不全患児の栄養管理の実際-施設給食について-	共	2008年8月	日本小児腎不全学会雑誌第28巻	<p>保存期慢性腎不全患児の通園、通学する施設での「給食」の栄養管理の方法や問題点について症例を挙げ、報告した。各症例は、公立保育所に通所している1歳男児、公立幼稚園に通園している3歳女児、小学校に通学している9歳女児である。それぞれの施設において、食事療法の良否を左右する「給食」の管理を実施するためには、各施設における関係者の理解や協力が必要不可欠である。 (pp:78-79) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 大津美紀、濱谷亮子、飯塚美和子、服部元史 (査読無)</p>
9. 食事療法の継続における栄養士の役割について	共	2008年9月	小児PD研究会雑誌第20巻	<p>患者、個々に見合ったサポートを行うには、関係者との協力そして連携が重要である。小児PD患児だけでなく、他の疾病も含め、患児、ならびに家族のQOLを高めるサポートについて今後も検討の継続が必要である。さらに、食事療法を必要とする対象者へのサポートを図れるよう、疾病治療における食事療法の意義ならびに栄養士の役割を確立していきたい。 (pp:40-43) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 大津美紀、濱谷亮子、武田佳奈子、飯塚美和子、服部元史 (査読無)</p>
10. 食事療法におけるアセスメント -たんぱく質量とアミノ酸スコアについて-	共	2009年8月	日本小児腎不全学会雑誌第29巻	<p>対象となった患児の食事記録からアミノ酸スコアを算出したところ、特徴として、離乳食を摂取している幼児ではミルクを摂取することによりアミノ酸スコアは比較的高かった。幼児期・学童期になると様々な食品を摂取するようになるが、食事摂取量が安定しない場合には制限アミノ酸が認められた。効果的な食事療法を継続するために、各栄養素の「質」にも着目することでより食事療法の意義を高めることができるであろう。今後、「量と質」を捉え、食事療法の継続を図りたいと考える。 (pp:303-305) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 大津美紀、濱谷亮子、服部元史 (査読無)</p>

11. 乳汁栄養管理を実施した先天性ネフローゼ症候群の乳児例	共	2009年8月	日本小児腎不全学会 雑誌第29巻	先天性ネフローゼ症候群の男児に対する栄養管理の経過について報告した。乳汁栄養管理時は良好な成長発育が期待できるが、離乳食移行後は食品選択の幅が広がることにより、食事性アミノ酸量比は変化し、制限アミノ酸が認められた。(pp:306-308) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、服部元史 (査読無)
12. 乳幼児期慢性腎不全における離乳支援について	共	2011年 7月	日本小児腎不全学会 雑誌第31巻	慢性腎不全において栄養管理は重要な意味を持つ。特に、乳幼児期の腎不全においては、成長に関わる因子として「栄養」が挙げられる。成長や栄養摂取状況を判断した上で、乳汁栄養を継続し、十分なエネルギー摂取量を確保することが成長・発育促進ならびに治療においても重要な意味を持つと考える。(pp:65-66) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 <u>太津美紀</u> 、濱谷亮子、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史 (査読無)
13. 小児腎臓病における治療用特殊ミルクを併用した離乳支援	共	2011年 7月	日本小児腎不全学会 雑誌第31巻	離乳期は食事摂取量が変動しやすく、それに伴い、エネルギー、栄養素等摂取量も変動しやすい傾向にある。また、摂取食品が増加することに伴い、リン、カリウム等が増加する一方、不足する傾向にある栄養素もある。これらことから、離乳食からのエネルギー・栄養素等摂取量を把握し、栄養量の過不足を招かないように治療用特殊ミルクを含めた乳汁栄養を併用する重要性が認められた。(pp:67-68) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史 (査読無)

<p>14. 小児慢性腎臓病における高ホモシステイン血症の出現率について</p>	<p>共</p>	<p>2011年 7月</p>	<p>日本小児腎不全学会 雑誌第31巻</p>	<p>慢性腎臓病における高ホモシステイン予防ならびに改善に向けた栄養管理として、日本人の食事摂取基準に示されている推奨量を維持すること、ならびに腎機能の低下に伴う血清ホモシステイン上昇を改善しうる付加量の必要性を検討し、予後に及ぼす影響を検討することが今後の課題となると考えられた。(pp:69-70) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 濱谷亮子、<u>大津美紀</u>、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史 (査読無)</p>
<p>15. 小児期に腎移植を受けた若年成人レシピエントの上腕-足首脈波伝播速度 (baPWV) に関する検討</p>	<p>共</p>	<p>2012年12月</p>	<p>日本小児腎臓病学会 雑誌第25巻</p>	<p>小児期に腎移植を受けた若年成人レシピエントを対象に上腕-足首脈波伝播速度 (brachial-ankle pulse wave velocity: baPWV) を測定し、CVD リスクを検討した。baPWV 高値群 (>14 cm/sec.) は低値群 (≤14 cm/sec.) と比較して、血圧、シクロスポリン服用頻度、移植後経過年数、そして血清ホモシステイン値は有意に高値を示し、またeGFR は有意に低値であった。若年成人腎移植レシピエントにおいても、CVD リスクを早期から適切に把握し、関連する諸因子を適正に管理することの重要性が示された。(pp:114-119) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 濱谷亮子、<u>大津美紀</u>、菅原典子、石塚喜世伸、菅原典子、近本裕子、秋岡祐子、服部元史 (査読有)</p>
<p>16. 小児および思春期・若年成人腎移植レシピエントの栄養摂取状況と食習慣の特徴に関する検討</p>	<p>共</p>	<p>2013年10月</p>	<p>日本腎臓学会誌 第 55巻 第7号</p>	<p>本研究ではeGFR60 ml/min./1.73m²以上で食事制限のない小児および思春期・若年成人腎移植レシピエントを対象に食事調査を行い、栄養指導の必要性について検討した。小児および思春期・若年成人腎移植レシピエントの栄養摂取状況と食習慣の特徴が明らかとなり、これら患者に対する栄養指導の必要性が示された。 (博士論文) (pp:1320-1326) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 <u>大津美紀</u>、濱谷亮子、服部元史 (査読有)</p>

<p>(紀要論文)</p> <p>1. 母親の料理好きと幼児の食生活との関連</p> <p>2. 慢性腎不全保存期における食事療法についてーエネルギー・たんぱく質摂取量と腎機能の経過ー</p> <p>3. 慢性腎不全保存期患児の栄養管理の現状と課題</p> <p>4. 保護者の養育力エンパワーメントに関する研究① 保育実践に基づく情報提供が保護者の養育力に与える影響について</p>	<p>共</p> <p>共</p> <p>単</p> <p>共</p>	<p>2006年12月</p> <p>2007年3月</p> <p>2007年12月</p> <p>2009年3月</p>	<p>常磐短期大学研究紀要第35号</p> <p>国際学院埼玉短期大学研究紀要第28号</p> <p>常磐短期大学研究紀要第36号</p> <p>常磐短期大学研究紀要第37号</p>	<p>母親が「料理好き」の方が、食事時の会話や朝食・夕食における食事の品数、調理済み食品の使用について好ましい結果が得られた。また、幼児の食事のマナーやお手伝いの実施状況についても良い結果が得られた。(pp:7-15) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 武田佳奈子、<u>大津美紀</u>、中原経子 (査読有)</p> <p>保存期慢性腎不全患児に対する栄養食事療法により腎機能低下抑制ならびに透析導入時期の遅延を図ることが可能であった。離乳期の食事管理は喫食量の変動が激しく大変難しいが、管理栄養士による適切な栄養管理により継続することが可能であり治療において有効な手段であると推察される。(pp:57-61) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 濱谷亮子、<u>大津美紀</u> (査読有)</p> <p>慢性腎不全保存期患児を対象に栄養管理を主とした面接を行った。食事記録を基に、摂取栄養量や指示量に対する良否の検討、個々に適した食品構成や献立媒体の作成を行った。患児の成長の状況を見ると、成長曲線に沿って低成長ラインではあるが成長が観察された。食事の摂取状況を考えると、摂取量だけでなく、離乳の進み具合など各ライフステージにおける課題についても見られた。(pp:85-94) (査読有)</p> <p>紙媒体による情報の提供(ニュースレターとして配布)が保護者の子育てへの意識および実際の行動にどのような影響を及ぼす可能性があるのかについて明らかにすることを目的に、ニュースレターの作成・配布、質問紙調査を実施した。情報の提供は保護者の関心を高め、子どもの育ちに関する意識を向上させるために機能する可能性が高いことが明らかになった。(pp:52-58) 2007年度常磐短期大学課題研究助成補助による研究である。 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 鈴木康弘、江波諄子、木村由希、<u>大津美紀</u> (査読有)</p>
<p>(辞書・翻訳書等)</p> <p>1.</p>				

<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. 保存期慢性腎不全患児の施設給食の栄養管理について</p>	共	2009年10月	東京女子医科大学雑誌 第79巻、9・10合併号	慢性腎不全の小児では、在宅での栄養管理が治療上重要な意味を有しており、患児や家族を含めた栄養指導を継続して実施してきた。保育園・幼稚園、学校に通う小児の場合には、各施設での「給食管理」が必要であり、栄養管理には施設関係者の協力が必須である。そこで、患児が摂取する「給食」の特徴を踏まえ、栄養管理の方法や問題点について報告した。(pp:422) 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 太津美紀、濱谷亮子、近本裕子、秋岡祐子、服部元史
<p>2. 特集「健康栄養学科の抱負」臨床栄養学・臨地実習分野からの管理栄養士養成教育に関して</p>	単	2010年10月	常磐大学人間科学部紀要 第28巻、第1号	臨床栄養、また、臨床栄養臨地実習などの学外実習担当者として、管理栄養士養成教育に関する考えを述べた。(pp:33-34)
<p>3. 小児慢性腎臓病症例に対する治療用特殊ミルクを使用した栄養管理</p>	共	2010年11月	第22回腎不全食事療法研究会記録集	小児慢性腎臓病例に対する治療用特殊ミルクを使用した栄養管理例を経験したので、5症例について報告した。 〔共同研究につき担当部分抽出不可能〕 分担執筆 太津美紀、濱谷亮子、浮田千絵里、鈴木茂、土屋信昭、立松栄次、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史
<p>4. 女子学生の骨量と生活習慣の関係</p>	共	2021年3月	常磐大学人間科学部紀要、第38巻第2号	2017年～2019年に「唾液を用いた骨粗鬆症診断に向けての検討」の学内課題研究助成(共同)を受けた成果を報告した。対象となった女子学生211名の体格・骨量及び栄養摂取状況の結果をまとめた。 (太津(松崎)美紀・小池亜紀子・住吉克彦・服部浩子・飯村裕子・竹村彩・齋藤慎二)
<p>(国際学会発表)</p> <p>1. A Study of Junior College Students' Knowledge of Food Materials</p>	単	2008年9月	ICD2008 第15回国際栄養士会議(横浜)	短期大学生を対象に食生活や食体験および食育に関する意識に関する調査を実施した。加工食品の原材料の知識に関する項目について報告した。加工食品の名前や色、そして、イメージが加工食品の原材料の誤解を招いていることが考えられた。本発表は、2007年度常磐短期大学課題研究助成補助による研究である。

2. Relationship of bone mass to physique and lifestyle in male students	共	2022年8月	The 8th Asian Congress of Dietetics (第8回アジア栄養士会議) (横浜)	男子学生の骨量と身長、栄養摂取状況ではたんぱく質、ビタミンB1のみで関連を認めた。対象者の栄養摂取状況は少なく、骨量を維持する上では問題があると考え。また、小学校からの運動習慣のある者が多いことから、骨量との関連は認めなかったと推察される。今後、対象者を増やし、検討を継続していきたい。
(国内学会発表) 1. 慢性腎不全患児における高エネルギー・低蛋白質食による栄養管理および低蛋白質食におけるアミノ酸スコアに関する検討 2. 慢性腎不全患児における高エネルギー・低蛋白質食による栄養管理 3. ヘルスプロモーション支援のための生活習慣に現れる意識や行動の把握 4. 某企業を対象とした健康管理に関する意識調査 -第1報- BMI 25以上の男性社員の健康診断結果と食事実態 5. 某企業を対象とした健康管理に関する意識調査 -第2報- BMI 25以上の男性社員の健康のとらえ方や意識	共	2001年3月	第3回家政学関連卒業論文発表会 (東京)	高エネルギー・低蛋白質食による食事療法は腎不全の進行抑制に有効である。また、低蛋白質食においては、蛋白質摂取量ならびに良質の蛋白質が摂取されているかが重要な点となる。そこで、アミノ酸スコアを算出し蛋白質の栄養価について検討した。 (太津美紀、小澤紗穂、島田麻里、百瀬瑞恵、飯塚美和子)
2. 慢性腎不全患児における高エネルギー・低蛋白質食による栄養管理	共	2001年10月	第48回日本栄養改善学会学術総会 (大阪)	食事摂取状況と血液検査データを比較・検討したところ、指示エネルギー量、蛋白質量に対する摂取量の充足率が低い場合、BUNの上昇が観察された。 (太津美紀、百瀬瑞恵、飯塚美和子)
3. ヘルスプロモーション支援のための生活習慣に現れる意識や行動の把握	共	2002年11月	第49回日本栄養改善学会学術総会 (沖縄)	勤労者を中心とした20歳代から70歳代の男女に食生活に関する基礎調査を行ったところ、生活習慣の改善や病気の捉え方は人により意識や行動が異なることが明らかになり、対象者の意識をどう捉え、評価するかが重要な問題であると言える。 (太津美紀、濱谷亮子、飯塚美和子)
4. 某企業を対象とした健康管理に関する意識調査 -第1報- BMI 25以上の男性社員の健康診断結果と食事実態	共	2003年9月	第50回日本栄養改善学会学術総会 (岡山)	某企業の健康診断結果の解析を行った。また、BMI 25以上の社員対象としたアンケート調査を行った。生活習慣病の予防に向けて、20代からの肥満の予防、および肥満改善対策に取り組む必要性が示唆された。 (濱谷亮子、太津美紀、飯塚美和子)
5. 某企業を対象とした健康管理に関する意識調査 -第2報- BMI 25以上の男性社員の健康のとらえ方や意識	共	2003年9月	第50回日本栄養改善学会学術総会 (岡山)	健診においてBMI 25以上の男性社員にアンケート調査を行ったところ、生活習慣改善など行動変容に対する感情や思考など個人の特性は様々であった。今後、これらを基礎として個々への対応、支援が必要である。 (太津美紀、濱谷亮子、飯塚美和子)

6. 嚥下障害患者の栄養管理への取り組み	共	2003年10月	第25回日本臨床栄養学会総会・第24回日本臨床栄養協会総会大連合会 (横浜)	嚥下障害のある患者に対し、チームで入院中から退院後の生活までのトータルなケアができるようになったことが患者のQOL向上に繋がった。今後はこの取り組みがシステム化できるようにしていきたい。 (杉山真規子、大澤繁男、高橋美恵子、 <u>太津美紀</u> 、藤谷順子、荒木謙太郎)
7. チーム医療による集団教育(生活習慣病教室)の食行動変容の効果と今後の課題	共	2003年10月	第58回国立病院療養所総合医学会 (東京)	生活習慣病教室のあり方について検討するため、アンケートを行ったところ、参加者の理解度、講義の満足度は高かった。また、講師側の問題点も明らかになり、今後の教室の運営に生かしていきたい。 (高橋美恵子、大澤繁男、杉山真規子、小楠智彦、 <u>太津美紀</u> 、葛谷信明、梶尾裕、西田美佐、督永紋子)
8. 高度栄養障害をきたした肺MAC症患者への栄養治療の検討	共	2004年3月	第9回関東信越国立病院管理栄養士協議会学会 (東京)	肺MAC症により高度な栄養障害をおこした症例に対して積極的な栄養療法を試みたところ、栄養状態の改善が見られた。 (杉山真規子、大澤繁男、高橋美恵子、森山裕、 <u>太津美紀</u> 、濱元陽一郎、河内正治)
9. 当センター入院患者の栄養状況の現状と今後の対応	共	2004年3月	第9回関東信越国立病院管理栄養士協議会学会 (東京)	入院患者の低栄養が明らかとなり、この現状を改善するために、低栄養患者の摂取量を増やす工夫を怠ることなく介入し、すべての治療の基本は栄養管理にあることを医療スタッフが強く認識するように働きかけていかなければならない。 (高橋美恵子、大澤繁男、杉山真規子、森山裕、 <u>太津美紀</u> 、河内正治)
10. 某企業における健康管理の取り組みへの支援	共	2004年10月	第51回日本栄養改善学会学術総会 (石川)	企業との連携をはかり、社員の健康管理への取り組みの1つとして検査値の解析ならびに食生活に関する支援を行っている。こうした社員の健康管理、疾病予防に向けての企業側の取り組みは高く評価できるものである。 (濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、飯塚美和子)
11. 保存期慢性腎不全患者を対象としたたんぱく・高エネルギー食による栄養管理	共	2004年10月	第26回日本臨床栄養学会総会・第25回日本臨床栄養協会総会大連合会 (大阪)	保存期慢性腎不全患者は全体として摂取エネルギー不足、たんぱく質過剰が目立ち、それが検査値に反映している一因であることを理解させることがBUNの上昇を防ぐのに有効であることを認めた。 (濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、飯塚美和子、服部元史)

12. N S T 導入へ向けて入院患者の栄養実態調査とその後の活動	共	2004年10月	第1回国立病院栄養研究学会 (東京)	入院患者の栄養状態と補給量および充足率の調査・検討を行った。この結果を踏まえ、今後のN S T 設立へのアピールに生かしてゆきたい。 (杉山真規子、秋葉正文、長谷川輝美、森山裕、 <u>太津美紀</u> 、河内正治、高橋美恵子、大澤繁男)
13. 当センターにおける栄養状態および摂取エネルギー量の実際とその評価	共	2005年2月	第20回日本静脈経腸栄養学会 (名古屋)	入院患者を対象とした調査により、入院患者の約3割が低栄養であることが明らかになった。この現状を改善するため、N S T 設立を目標としたN S T 委員会の立ち上げが決定した。 (杉山真規子、秋葉正文、長谷川輝美、森山裕、 <u>太津美紀</u> 、河内正治、高橋美恵子、大澤繁男)
14. 小児保存期慢性腎不全患児の栄養管理	共	2005年9月	第27回日本小児腎不全学会 (箱根)	2歳7ヶ月から12歳11ヶ月までの女児の食事管理を行い、小児保存期慢性腎不全患児の発育において栄養管理は腎機能保持、成長発育に有用であると考えられた。 (<u>太津美紀</u> 、濱谷亮子、飯塚美和子、服部元史)
15. 栄養管理によりB U N の低下が見られた乳幼児低形成腎患児の例	共	2005年9月	第27回日本小児腎不全学会 (箱根)	保存期慢性腎不全患児に対して、発育状況また検査値の推移と食事摂取量をよく観察し、食事管理を行うことは必要不可欠であることが確認された。 (濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、飯塚美和子、服部元史)
16. 小児保存期慢性腎不全患児の治療における栄養管理の有効性の検討	共	2006年9月	第28回日本小児腎不全学会 (大津)	B U N と食事摂取状況から栄養管理の有効性について検討を行ったところ、腎機能低下の抑制・透析導入の遅延、さらに成長発育段階にある小児期においては栄養管理が治療の手段として有効であると考えられた。 (<u>太津美紀</u> 、濱谷亮子、飯塚美和子、服部元史)

17. 産業保健での栄養教育の取り組み -生活習慣や健康意識の実態調査-	共	2006年10月	第53回日本栄養改善学会学術総会 (茨城)	社員の食生活の特徴として、朝食率の欠食率や外食の利用頻度が高く、野菜料理の摂取頻度は1日1回が最も多かった。生活習慣病の予防に対して「自覚症状」や「生活への支障」が出てから実行しようとしているものが約4割であった。 (<u>太津美紀</u> 、 <u>濱谷亮子</u> 、 <u>飯塚美和子</u>)
18. 産業保健での栄養教育の取り組み -健康診断結果に基づいた栄養教育-	共	2006年10月	第53回日本栄養改善学会学術総会 (茨城)	企業での栄養教育の取り組みについて報告した。健康診断結果などの推移やその意味を知ることにより、個々の食生活を振り返るきっかけになることがわかり、また検査値の改善は行動変容継続への動機付けになっていた。 (<u>濱谷亮子</u> 、 <u>太津美紀</u> 、 <u>飯塚美和子</u>)
19. 食事療法の継続における栄養士の役割について	共	2006年10月	第20回小児PD研究会ワークショップ (静岡)	長期に食事療法を継続するためには、実践可能な指導・教育内容のほかに、家族をはじめとするサポートが欠かせない。特に小児では家族に食事管理を依存することが多いので、家族への指導・教育が不可欠となる。対象と家族を含めた栄養指導・教育、そしてサポートが重要である。 (<u>太津美紀</u> 、 <u>濱谷亮子</u> 、 <u>武田佳奈子</u> 、 <u>飯塚美和子</u> 、 <u>服部元史</u>)
20. 慢性腎不全保存期患児の栄養管理の現状および課題	共	2007年9月	第17回近畿輸液・栄養研究会 (大阪)	先天性の低形成腎を主とした慢性腎不全保存期患児に対して、栄養管理を実施している。食事の摂取状況は、幼児期ではエネルギー・たんぱく質の不足傾向であり、学童期以降ではたんぱく質過剰傾向であった。離乳食中の患児は、幼児期や学童期の患児に比べ、エネルギー・たんぱく質共に不足傾向が強かった。 (<u>太津美紀</u> 、 <u>濱谷亮子</u> 、 <u>服部元史</u>)
21. 産業保健における栄養指導の取り組み -生活習慣改善意欲の実態と栄養指導のニーズについて-	共	2007年9月	第54回日本栄養改善学会学術総会 (長崎)	平成14年度より生活習慣病の予防・治療を目的に、社員に栄養教育・指導を実施している。アンケート調査の結果、生活習慣や健康づくりに関する情報源として、管理栄養士が直接介入を行える場を充実させる必要性が示唆された。また、「早食い」や「食事量」などの改善が必要であると指摘できる点について自覚していた。今後、保健指導に向けて情報提供や生活習慣病の予防・治療のための健全な食生活の実践につながるよう支援していきたい。 (<u>濱谷亮子</u> 、 <u>太津美紀</u> 、 <u>飯塚美和子</u>)

22. 産業保健における栄養指導の取り組み -新入社員の健康意識調査-	共	2007年9月	第54回日本栄養改善学会学術総会 (長崎)	新入社員の健康意識について調査を行った。「食生活に関する指導を受けたいと思いますか」に対し、「ぜひ受けたい」と「時間があれば受けたい」が85.0%であり、理由として「興味がある」が最も多かった。これまでの健診結果から、年齢が上がるに従い疾病へのリスクが高くなり、また、食習慣の変容が困難であることが明らかであるため、本結果を健康教育のプログラム作成や入社時の若い時期を対象にした栄養指導支援に生かしていきたい。 (<u>大津美紀</u> 、濱谷亮子、飯塚美和子)
23. 小学校高学年児童の運動習慣と生活習慣の関連性	共	2007年9月	第54回日本栄養改善学会学術総会 (長崎)	水戸市立T小学校5,6年生の児童を対象に、運動習慣、食習慣、睡眠習慣等についてのアンケート調査を実施した。学童期における「運動」は基礎体力をつける他に、成人期以降の運動習慣を身につけること、社会性を育てるなどの要素があるが、本調査より、「運動習慣」が生活習慣との関連性があることが考えられた。 (<u>関根明</u> 、 <u>大津美紀</u> 、中原経子)
24. 栄養管理にて良好な成長発育が得られた三尖弁閉鎖症術後腎不全の1乳児例	共	2007年9月	第29回日本小児腎不全学会総会・学術集会 (松江)	出生前診断にて胎児心奇形・三尖弁閉鎖症と診断され、生後11日目に心不全、肺炎を合併し、バルーン心房中隔裂開術と肺動脈絞扼術後に、腎機能障害を残した患児に対する栄養管理を行ったので報告した。指示栄養量を満たすために、食生活を考慮した食品構成を作成し、栄養管理を行った結果、ほぼ指示栄養量で遵守した栄養管理が可能であった。 (濱谷亮子、 <u>大津美紀</u> 、服部元史)
25. 保存期慢性腎不全患児の栄養管理の実際 -施設給食について-	共	2007年9月	第29回日本小児腎不全学会総会・学術集会 (松江)	保存期慢性腎不全患児には、自宅での栄養管理が治療の一端を担う。そのため、患児、調理担当者や家族を含めた栄養指導を継続してきた。保育園・幼稚園、学校に通う患児には、各施設で提供される「給食」が食事療法の良否を左右する要素になる。そのため給食を含めた栄養管理を実施するため、給食関係者の協力が必須である。そこで、患児が摂取する「給食」の特徴を踏まえ、行なった栄養管理の方法や問題点について報告した。 (<u>大津美紀</u> 、濱谷亮子、服部元史)

26. 短期大学生の食生活・食体験の実態と考察①	共	2008年5月	第2回日本食育学会 総会・学術総会 (東京)	短期大学生を対象に調査を実施したところ、約40%が朝食を毎日食べていないとしていた。その他、「朝食の必要性」、「子供の欠食」などの考え方についても結果を得た。今回の結果より、朝食は必要であり、摂るべきと考えている一方で、実際には自分自身で実践できていないことがわかった。また、自分の食生活が良くないと認識しており、自分自身に子どもができた時には改善が必要であると考えている学生が多くみられた。 (鈴木美理、木村由希、大津美紀)
27. 短期大学生の食生活・食体験の実態と考察②	共	2008年5月	第2回日本食育学会 総会・学術総会 (東京)	短期大学生を対象に食生活や食体験および食育に関する意識に関する調査を実施した。「稲の栽培」、「野菜の栽培」の体験について、また、「料理の頻度」について報告した。食育を考える上で、栄養士のみならず食育に関わるすべてのスタッフへの食体験をはじめとする研修、さらに、個々の養成課程での教育の必要性も示唆される。そのことにより、さらに食育活動がより良いものになると考える。 本発表は、2007年度常磐短期大学課題研究助成補助による研究である。 (大津美紀、鈴木美理、木村由希)
28. 短期大学生の食生活・食体験の実態と考察③	共	2008年5月	第2回日本食育学会 総会・学術総会 (東京)	幼児教育保育学科2年生の課題研究において、「①ラディッシュ、稲の栽培活動」、「②収穫物を利用した未就園児との食体験活動」の実践活動を行い、その活動記録、アンケート、参加学生の感想等から考察した。 本発表は、2007年度常磐短期大学課題研究助成補助による研究である。 (木村由希、鈴木美理、大津美紀)
29. 産業保健における栄養指導の取り組み-新入社員の食意識について-	共	2008年9月	第55回日本栄養改善 学会学術総会 (神奈川)	2006年度より、新入社員に健康意識に関する調査を行っており、新入社員の実態の把握を行ってきた。調査項目は生活習慣や食事の摂取状況および健康意識に関するものである。今年度より開始される特定保健指導の対象は40歳以上であるが、早い時期、特に生活の変化を伴う入社時期に食生活の改善をサポートするための教育が必要と考えられる。今後、対象となった新入社員の追跡調査を実施したいと考える。 (大津美紀、濱谷亮子、飯塚美和子)

30. 食事療法におけるアセスメントーたんぱく質量とアミノ酸スコアについてー	共	2008年10月	第30回日本小児腎不全学会総会・学術集会 (那須塩原)	食事療法において、指示栄養量に準じた栄養素等摂取量の確保が治療には有効であり、指示栄養量に対して摂取栄養量を算出し摂取量として評価することが原則といえる。保存期慢性腎不全ではエネルギー・たんぱく質コントロール食が実施され、指示量のたんぱく質の中で、治療効果を期待するには「量」のみならず、「質」の評価が重要となる。 (太津美紀、濱谷亮子、服部元史)
31. 乳汁栄養管理を実施した先天性ネフローゼ症候群の乳児例	共	2008年10月	第30回日本小児腎不全学会総会・学術集会 (那須塩原)	先天性腎疾患を有する乳幼児に対する栄養管理は治療手段の1つであり、乳児期における成長障害に影響を及ぼす低栄養状態の改善が重要な課題と言える。指示量に準じたエネルギー・たんぱく質摂取量を適切な栄養管理の下、摂取することが1つの課題であるが、たんぱく質のアミノ酸スコアについても食事性たんぱく質が窒素平衡の維持、体重増加など生体に対してたんぱく質の効果をもたらすには一定のアミノ酸の量比が必要となるため考慮することが必要である。先天性ネフローゼ症候群の男児に対する栄養管理を展開した経過について報告する。 (濱谷亮子、太津美紀、服部元史)
32. 保存期慢性腎不全患児の施設給食の栄養管理について	共	2009年7月	第34回東京女子医科大学在宅医療研究会 (東京)	小児の慢性腎不全患者の栄養管理を進める上で、各施設で食べる給食の支援は栄養管理のポイントになり、施設関係者との連携、サポートが必要であると考え。今後、施設での「給食」について、患児や家族、メディカルスタッフなどに対して理解を深めてもらうためにさらなる努力が必要である。 (太津美紀、濱谷亮子、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)
33. 産業保健における栄養指導の取り組みー2006～2008年度新入社員の意識調査ー	共	2009年9月	第56回日本栄養改善学会学術総会 (北海道)	某企業新入社員を対象に「食事・生活習慣」、「健康・病気の意識」について調査を実施しところ、約60%の人が朝食を毎日摂取しているとしていた。「朝食・夕食の形態」、「気になる病気」、「栄養指導の希望の有無」について結果を得た。今回の結果より、何らかの不安や健康に関する興味を抱く社員に対して、早期に介入することにより、行動変容をより誘導しやすいと考える。さらに個別指導を実施することにより、生活習慣病の予防をはじめ、健康の維持増進に繋がるのではないかと考える。 (太津美紀、濱谷亮子、鈴木美理、飯塚美和子)

34. 短期大学生の体型認識および食知識について	共	2009年9月	第56回日本栄養改善学会学術総会 (北海道)	短期大学生を対象に体型認識と食知識について調査を実施したところ、「適正だと思う体重」と「BMI22の時の標準体重」に有意差が見られた。その他、「ダイエット経験」、「体型の過大・過小評価」「食品の分類」などについても結果を得た。今回の結果より、対象の学生の多くは誤った体型認識をしており、これらが過度なダイエットを引き起こすことが考えられた。また、食知識も不足していることから、今後、健康な生活を送るために正しい知識の取得を目指す必要があることがわかった。 (鈴木美理、大津美紀、木村由希)
35. 当院での心臓大血管手術後患者への栄養指導の取り組み	共	2009年9月	第56回日本栄養改善学会学術総会 (北海道)	栄養指導対象者の現状把握と指導内容の充実を図ることを目的に、平成19年1月5日～1月28日まで心臓血管外科の入院患者を対象にアンケート調査を行ったので、結果について報告した。 (武田佳奈子、小島慶子、大津美紀)
36. 産業保健における新入社員を対象とした栄養指導の重要性 第1報 一体重と食生活について	共	2010年9月	第57回日本栄養改善学会学術総会 (埼玉)	本発表では、新入社員に対する調査のうち、「内定時」と「入社時」の身体状況、食生活状況を分析し、新入社員の健康管理上の問題点について考察した。 (大津美紀、濱谷亮子、飯塚美和子)
37. 産業保健における新入社員を対象とした栄養指導の重要性 第2報 一飲酒について	共	2010年9月	第57回日本栄養改善学会学術総会 (埼玉)	本発表では、新入社員飲酒状況を分析し、飲酒に関する情報提供の必要性の検討について報告した。入社時からの適切な飲酒量や飲酒頻度を理解し自己管理できるよう情報提供を行うこと、さらには社員に対する栄養指導を通して多量飲酒の早期発見・予防することが重要であると考えられた。 (濱谷亮子、大津美紀、飯塚美和子)
38. 乳幼児期慢性腎不全における離乳支援について	共	2010年9月	第32回日本小児腎不全学会 (北海道)	慢性腎不全において、十分なエネルギーなどの栄養素量を確保することが成長・発育促進ならびに治療においても重要な意味を持つと考えられる。そこで、乳汁栄養管理を実施した栄養指導例に基づき、乳幼児期慢性腎不全における離乳の意義、離乳支援について検討を行い、報告した。 (大津美紀、濱谷亮子、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)

39. 小児腎臓病における治療用特殊ミルクを併用した離乳支援	共	2010年9月	第32回日本小児腎不全学会 (北海道)	腎疾患を有する乳幼児において、栄養管理は成長障害に影響を及ぼす低栄養状態の改善において重要な課題である。今回、治療用特殊ミルクを併用した離乳支援を実施した、多発性のう胞腎症例について経過報告した。 (濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)
40. 小児慢性腎臓病における高ホモシステイン血症の出現率について	共	2010年9月	第32回日本小児腎不全学会 (北海道)	慢性腎臓病を対象とする観察研究において、高ホモシステイン血症は心血管疾患の危険因子であると報告されている。本発表では小児期、青年期の慢性腎臓病における血清ホモシステイン値の実態、分布状況について報告した。 (濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)
41. 小児慢性腎臓病症例に対する治療用特殊ミルクを使用した栄養管理	共	2010年11月	第22回腎不全食事療法研究会 (東京)	小児慢性腎臓病例に対する治療用特殊ミルクを使用した栄養管理例を経験したので、5症例について報告した。 (<u>太津美紀</u> 、濱谷亮子、浮田千絵里、鈴木茂、土屋信昭、立松栄次、石塚喜世伸、菅原典子、谷口貴実子、上田博章、藤井寛、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)
42. 新入社員の体型、病識、生活習慣が健康度に及ぼす影響	共	2011年 9月	第58回日本栄養改善学会学術総会 (広島)	本調査では、新入社員を対象とし、体型、病識、生活習慣などを調査し、健康度(主観的)との関連を検討した。20歳代の健康度に影響を与える要因として、体型や病識、生活習慣が考えられた。これらのことから、健康教育に際して、対象者の健康度やその背景にある要因を踏まえ、ニーズにあった教育内容を展開することの必要性が示された。 (<u>太津美紀</u> 、濱谷亮子、飯塚美和子)
43. 小児腎移植レシピエントの動脈硬化リスクに関する臨床的検討	共	2012年 6月	第47回日本小児腎臓病学会 (東京)	腎移植後においても腎機能低下に伴い、高ホモシステイン血症の出現率が増加することが明らかとなった。血清ホモシステインと動脈硬化の関連、ならびに動脈硬化進展抑制に対する血清ホモシステイン管理の有効性について更なる検討が必要であると考えられた。 (濱谷亮子、 <u>太津美紀</u> 、菅原典子、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)

44. 小児慢性腎臓病患者における栄養素等摂取状況 - 葉酸摂取について -	共	2013年 1月	第16回日本病態栄養学会年次学術集会 (京都)	心血管疾患はCKD (慢性腎臓病) の主要死因として挙げられ、発症の要因の1つとして血清ホモシステイン上昇がある。ホモシステインの代謝において、ビタミンB群 (V. B6、V. B12、葉酸) が補酵素として作用するため、これらの栄養素の管理が必要となる。本研究では、小児CKD患者の葉酸摂取量の状況を把握することを目的とし、その摂取量について報告した。 (<u>大津美紀</u> 、濱谷亮子、菅原典子、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)
45. 小児期に腎移植を受けた思春期及び若年成人の高ホモシステイン血症の出現率ならびに葉酸管理の必要性について	共	2014年3月	第11回日本小児栄養研究会 (東京)	小児期に腎移植を受けた思春期及び若年成人を対象に、心血管疾患 (CVD) の発症に関連するリスク因子である高ホモシステイン血症の出現率、血漿葉酸レベルについて調査した。 (濱谷亮子、 <u>大津美紀</u> 、近本裕子、秋岡祐子、服部元史)
46. 女子大学生の骨量と生活習慣との関係について	共	2018年9月	第65回日本栄養改善学会学術総会 (新潟)	147人の女子大生を対象に骨量と生活習慣との関係について検討を行った。対象のStiffnessは101±16であり、基準値より有意に高かった。過去6年以上の運動習慣あり群 (L群) となし群 (S群) で比較したところ、L群では有意にStiffnessが高かった。栄養摂取量では2群間で差が認められなかったが、摂取量が不足しているため食生活の改善が必要である。今後、2回目の調査を行う予定であり、骨量や栄養摂取量の変化を評価したいと考える。 本発表は、常磐大学課題研究助成による成果の一部である。 (<u>大津美紀</u> 、小池亜紀子、小林晶子、田地陽一)
47. 女子大学生の骨量と生活習慣の関係	共	2019年9月	第66回日本栄養改善学会学術総会 (富山)	骨粗鬆症は要介護に至る原因疾患の上位にあり、発症してから治療しても改善が困難な疾患である。その予防については若年期に十分な最大骨量を得て、閉経に至るまでにその維持が重要と報告されている。そこで本研究では若年期からの骨粗鬆症予防を目指し、女子大学生を対象に、過去と現在の運動習慣および現在の栄養摂取状況と骨量の間を関連を検討した。 本発表は、常磐大学課題研究助成による成果の一部である。 (小池亜紀子、 <u>大津美紀</u> 、服部浩子、住吉克彦、飯村裕子、田地陽一)
48. 女子大学生の過去の食習慣および運動実施状況と骨量の間	共	2020年9月	第67回日本栄養改善学会学術総会 (北海道・誌上開催)	女子大学生において、体格は身長と除脂肪量が、生活習慣では小学校から現在までの運動習慣、中学校での欠食習慣が骨量と関連していた。 本発表は、常磐大学課題研究助成による成果の一部である。 (小池亜紀子、 <u>大津美紀</u> 、服部浩子、住吉克彦、飯村裕子、田地陽一)

49. 女子大学生の習慣的欠食者の栄養学的特徴と骨量	共	2021年10月	第68回日本栄養改善学会学術総会 (誌上開催)	「欠食」の有無による栄養摂取状況等の比較検討を行った。結果より「欠食あり群」では菓子類、嗜好飲料の摂取が多いことが栄養素等摂取の不足に影響していることが推察された。欠食習慣の有無による骨量との関連は認められなかったが、栄養摂取状況や食品群別摂取状況において差を認め、今後の骨量維持の上では改善の必要性を認めた。 本発表は、常磐大学課題研究助成による成果の一部である。 (太津美紀、小池亜紀子、服部浩子、飯村裕子、住吉克彦、齋藤慎二)
(演奏会・展覧会等) 1.				
(招待講演・基調講演) 1. 第8回山形こどもの腎研究会での講演	単	2011年6月25日	山形こどもの腎研究会	山形こどもの腎研究会において「小児における栄養管理のポイント ～症例を経験して～」について講演を行った。
2. 茨城県栄養士会主催地域活動専門研究会研修会	単	2012年11月30日	地域活動専門研究会研修会	茨城県栄養士会が主催する地域活動専門研究会研修会において「高齢者の健康を支える食生活の工夫」について講演を行った。
(受賞(学術賞等)) 1.				

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1.						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1.						
(共同研究・受託研究受入れ) 1.						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1.						

(学内課題研究(共同研究))						
1. 2007年度課題研究助成	分担		2007年度		1,550千円	保護者の養育力育成を視野に入れた子育て支援プログラムの検討
2. 2017年度課題研究助成	分担		2017年度 ～2019年度		2,617千円	唾液を用いた骨粗鬆症診断に向けての検討
2017年度課題研究助成(分担の変更)	代表		2018年度 ～2019年度		—	唾液を用いた骨粗鬆症診断に向けての検討 (分担の変更)
(学内課題研究(各個研究))						
1.						
(知的財産(特許・実用新案等))						
1.						